
ざ・ほもさびえんす

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ざ・ほもさぴえんす

【Nコード】

N5657D

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

有りそつで無さそうな話です。ブラックユーモアです。固定の登場人物はおりません。同じ名前の人物が再度登場する場合がありますが、同一人物じゃない場合があります。投稿も不定期です。よかつたら暇つぶしにお読み下さい。（^^）

チーム

鈴木邦子^{くにこ}は60歳の誕生日を迎えた。

そんな事一々言わんでもよろしい。そもそも女性の年齢をあからさまに公表しちゃいけない。

孔子曰く「六十にして耳順^{じゆん}」。日本にも「耳順^{じゆん}」がある。

しかし、邦子はどうしても聞けない、聞く訳にはいかない、聞きたくない言葉があった。

「尿検査の結果、糖が検出されました。血液検査でも血糖値が高く出ています」

「もしかして、私……」

「そうです。糖尿病です。これからは糖分を沢山摂取しないように心がけて下さいね。そんなに顔色を変えなくても大丈夫ですよ。鈴木さんのは、まだ初期の段階なので糖分を摂取しなければ大丈夫。お菓子類は食べれませんが、食事は普通に食べてもらってOKですよ」

孫と誕生日ケーキを食べたいし、TV番組で紹介された飲食店にも行きたい。老後は好きな事をして暮らしたいのに、スイーツ好きの私にお菓子を食べたらいけないなんて、拷問よ！！

邦子の心の叫びは医師に届かない。医師は淡々と処方を書き邦子に渡した。

「お薬を出しておきますね。糖尿病の薬は結構重要ですので毎食忘れずに必ず飲んで下さい」

邦子は支払いを済ませて薬を受け取った。中味をしてみる。ラムネのような白い錠剤。お菓子のようでお菓子じゃない。

これを毎日口に入れないといけない。しかも丸飲み。まるで詐欺の被害にあったような心境だ。

家に帰り、主人や子供たちに糖尿病になったと告げると、

「年がら年中、甘いものばかり食べているから糖尿病になるんだ」

と主人は言い、

「糖尿病は進行すると、診察代や薬代にすごいお金がかかるようになるんだからね。医者という事をちゃんと聞いて、絶対に甘いものは食べないでね」

と子供たちは口を揃えて言う。

甘いものを食べるしか生き甲斐がなかった邦子は、事有ることに家族から言われるようになり、笑顔の無い日が続くようになった。

そんなある日。

買い物の途中、近所の芳子^{よしこ}さんとはったり出会った。芳子さんは59歳。年齢が近いせいで話が合い邦子と仲良し。

「え！ 邦子さんが糖尿病。なんか気の毒だわ」

話しているうちに、もう一人が買い物カゴをさげて現れた。知子^{ともこ}さんはまだ46歳だが、彼女の聞き上手な性格を邦子は気に入っている。

「糖尿病！ 本当なのですか？」

邦子は二人に、家族の冷たい言動や、甘いものを制限される辛さをぶちまけた。

芳子と知子は、邦子の話を自分の事のように聞き、邦子をなぐさめる。

「邦子さん、元気を出して。早期の糖尿病って、症状がよくなれば治ったも同然で、甘いものが食べれるようになるっていうじゃない」

「そうですよ。ちょっとした我慢じゃないですか」

「そのちよつとを我慢するのが辛いのよ」

「大丈夫よ。私たちがついていくわ。ねえ、知子さん」

「ええ。私も邦子さんが早くよくなるように応援するわ」

「邦子さん、これをあげるから元気を出して」

芳子は、ポケットからアメを出すと邦子の手の平に載せた。

「でも、私糖尿病で、甘いものはダメって言われてて」

邦子は困った表情をする。知子は邦子の肩をポンと叩く。

「小さなアメ1個くらい大丈夫よ。内緒で食べちゃえばバレやしな
いわよ」

「そうね。1つくらい、どうって事ないわよね」

邦子は戸惑いながらもアメを口に入れた。アメの甘さが口の中に
広がり邦子の表情は笑顔になった。久し振りに戻った邦子の笑顔は
とても清々しい。

この日を境に、芳子と知子は、何かと理由をつけて邦子を家の外
へ連れ出し、一口くらいの大きさの甘いものを邦子に渡すようにな
った。

時には家族の目を欺き、脇の下に甘いものを隠し移動してから渡
すしぐさが、さながらラグビーのパスのようで、次第に邦子の糖尿
病を知った人々に目撃されるようになり、

人々は、邦子を含めた三人を、チームと呼ぶようになった。

レトルト

「部長、これ、レトルトでしょうか？」

「どうだろうな。最近のレトルトは、作りたてみたいだから、見分けがつかんよ」

二人はテーブルに出された、たこ焼きを眺めた。

たこ焼きは横長の皿に載せられ、湯気と一緒にたこ焼きの上にある鰹節が揺れている。

「いい匂いですね」

「なんなら、課長、先に食べるといい。私はさっきの接待で食事をしてきたから、まだ満腹なんだ」

「いいんですか？」

課長は上目遣いで部長を見る。

部長はこくりと頷いた。

ここは夜の街で有名な新宿歌舞伎町。二人が今いるのは、ギャバクラ野の花。

得意先の接待を終えた部長は、仕事の打ち合わせも兼ねて、課長と飲みに来ていた。

課長はネクタイを緩めてから、勧められたたこ焼きをおいしそうに食べる。

部長は、次々とたこ焼きを食べる課長を、不思議そうに見ながらグラスの酒を一口飲んで唇をぬらした。

「なんだ、課長は食事をしていないのか？」

「ん？ あ、はい。食事はまだなんですよ」

課長は、口を動かしながら答える。たこ焼きも几帳面に半分残し、それ以上食べようとしない。

部長は、まだ皿の上にあるたこ焼きを見た。

「だったら残さず食べなさい」

「え、いいんですか。すいませんねえ。平が得意先の注文数を間違えて納品しちゃいまして、係長が謝罪しに行っただんですが、先方のお怒りが収まらなくて、私も謝りに行っただですよ」

「で、先方のお怒りは、収まったのかね？」

「はい、なんとか。今日は部長の接待が入っているし、部長を呼べ、なんて言われたらどうしようかと、冷や冷やしましたよ」

部長は、たこ焼きがなくなった皿を見る。

「そりゃ、大変だったな。課長のために、追加でピザを頼むか」

部長は、さっそくボーイを呼んで、ピザを注文した。

ボーイは床に膝をついてピザの注文をメモしてから顔をあげる。

「本日は、どの子をお呼び致しましょうか？」

「うーん、そうだな……」

部長は、今日の課長の機転と功労を労^{ねぎら}って、課長に話を回した。

「課長、今夜は誰にしようか？」

「部長は、どうします？」

「私の事はいいから、今夜は課長が決めなさい」

「本当にいいんですか？」

「なんだ、嫌なのかね？」

「いえ、嫌じゃないんですが……。それじゃあ、遠慮なく、ミカちゃんをお願いします」

課長は鼻の下を伸ばして注文する。ボーイはにつこりとしながらメモをとった。

「ミカちゃんですね。服装はレギュラーですか？ それともコスプレで？」

「もちろん、コスプレをお願いします。コスプレサービスが目当て

で、このキャバクラに来ているんだから、コスプレじゃないと、僕は帰りますよ」

課長は酒が入った勢いもあって、ボーイをちよつと冷やかす。

ボーイは慣れた表情で課長の相手をしている。

「どのコスプレにしましょうか？」

課長は出されたコスプレメニューを覗き込んだ。

「部長、この前はセーラー服でしたよね？」

「うん、確かそうだ」

「じゃあ、今夜はナースでいいですか？」

「いいぞ」

部長の了解のあと、ボーイはメモをとると足早に立ち去った。

課長はグラスの酒を口に含む。

「ここのサービスっていいですね。初めてこの店に来た時、僕の隣に座ってお酌^{しやく}してくれた女の子が、お姫様のコスプレしていて、それがかわいくって、忘れられないんですよ」

60近い部長は、目じりにシワを寄せて言う。

「私にとっては、どの子も孫みたいなものだな」

「孫のコスプレも、あつたほうがいいかもしれませんね」

「そうかもしれんが、私は孫が相手だと手が出しにくくなるな」

ニヤつきながら、部長も酒を飲む。

「まあ、なんだ」

部長は、言いかけてからグラスを置いてタバコに火をつけた。

「最近、店の女も日替わりで、とっかえひっかえだ。軟らかい子もおれば、硬い子もある。あつさりしたのもあれば、こつてりしたのもあり、実際に食^{あじ}べると脂^{あぶら}っぽかったりもする。値段もそれぞれで、高級なものあれば、安く済むものもある。私にとっては、夜の店で働く女も、レトルトみたいなもんだ」

課長は笑う。

「確かにそうですね。最近はメイド喫茶に対抗して、夜の店でもコスパレサービスをしてくれるし、彼女たちも姿が出来上がった状態で来てくれますもんね」

部長はタバコを吹かしながら、課長に忠告した。

「ただし、本気になるなよ」

「なりませんよ。手だって出しません。僕は妻子のほうが大事ですから」

部長は、長くなったタバコの灰を灰皿に落とした。

「いや、それよりも、人間同士なだけに、医者のお世話になったら、何かと面倒だからだよ。いろんな意味で」

「いろんな意味で……。そうですね」

課長の頭の中で、いろんな場面が映画のように投映されていく。40代の課長は、サスペンスドラマの情事を思い浮かべているようだ。

そして、脳内でサスペンスドラマ放映中の課長の目の前に、ピザを持ったナース、ミカちゃんが現れた。

あの子

小さな庭の、所々にある鉢植えには、澄子すみこが育てている季節の花が咲いている。

今、咲いているのは沈丁花しんちょうげ。上品な香りが心を落ち着かせる。

澄子が庭を見ながら、午後のティータイムを楽しんでいると、ドアホンの音がした。

「はぁーい」

「こんにちは」

「あら、いらっしやい。お絹さん、どうぞあがって」

絹は、澄子のご近所仲間。

今日は小春日和こはるびわく。といっても、沈丁花が咲く季節はまだ肌寒く、外で雑談するのが辛いため、絹はお菓子を持って澄子宅に遊びに来たのだ。

澄子はさっそく紅茶を入れて、沈丁花が見える窓際のテーブルの上に置いた。

「お絹さん、どうぞ」

絹は紅茶を受け取りながら言う。

「澄子さん、今日はマドレーヌを焼いたの。食べてね」

「まあ。私の大好きなマドレーヌだわ。嬉しい。頂きます」

二人は人心地着くと、いつもの雑談が始まった。

「うちの息子、爪を噛む癖が直らなくて、どれだけ言っても聞かないのよ」

絹は、腹を立てているのか、ふくれっ面でマドレーヌを食べている。

「でも、お絹さんの息子さんは、ご立派じゃない。爪を噛む癖だってサマになっていて羨ましいわ」

「うちの息子を誉め過ぎよ。あの子、そんなんじゃないわ。外面がいいだけ。澄子さんのように、娘が欲しかったわ」

「うちの娘のだって、マヨネーズが手放せなくて困っているのよ。お陰でまた太っちゃって」

澄子は、困った表情をしながらマドレーヌを食べている。

「どこが太ったのよ。最近、痩せたんじゃないかと心配しているんだから」

「あの子が痩せるはずじゃない。お絹さん、あの子の前で痩せたなんて言ったらダメよ。調子に乗って、なんにでもマヨネーズをかけるに決まってるんだから」

二人は同時に息を吐いた。

「はぁー、本当にあの子にも困ったもんだわ」

同じ言葉を同時に言ったため、澄子と絹は一緒に笑い出した。

澄子はマドレーヌに手を伸ばす。

「あの子は、いくつになっても私の子なんだと思い知らされるわ」

絹は紅茶を口に含み、口の中のマドレーヌを喉の奥へ流し込む。

「本当よね。私もいつも思うわ。自分の息子なんだと」

絹は、今年76歳。爪を噛む癖が直らない息子は、妻子持ちの51歳。

澄子は、今年103歳。マヨネーズ好きの娘は、夫に先立たれ今は独身。絹と同じ76歳だったりする。

親にとって子は、いくつになっても子なんですわね。

早苗ママの実験簿

洋太は5歳。ピーマンとニンジンとグリーンピースとタマネギとシイタケと魚が大嫌い。

早苗ママは洋太の偏食をとて悩んでいた。

「ママ、サラダにニンジンが入ってる。入れないでって言ってるのに」

「味がしないように、薄くスライスしてあるから食べてみて。きつとニンジンの味はしないから」

「口に入れるのもイヤ」

洋太の食わず嫌いを懸念して早苗ママは言う。

「我慢して食べなさい」

「イヤ」

洋太は、怖い表情をしているだろう早苗ママの顔を予想して、目を合わせずに言ってから、サラダを後回しにしてハンバーグを口に入れた。

「ママのハンバーグは、いつもおいしいから大好き」

ハンバーグの味を誉められて、早苗ママの表情は緩み、息子かわいさについ妥協をしてニンジンを勧めるのをやめてしまう。

「肉ばかり食べていると体に悪いのよ」

誉められたあとの早苗ママの口調は優しくなる。本日は洋太の作戦勝ちのようだ。

しかし、洋太の偏食はいずれなんとかしなければならぬ。早苗ママは、ニンジンをやけてサラダを食べている洋太を見ながら次なる作戦を考えていると、パパが帰って来た。

「ただいまー」

洋太のパパは製薬会社の研究室で働いている。

「パパ　おかえりなさい」

洋太はゲーム仲間でもあるパパが大好き。

だが、パパにもパパとしての立場がある。

「洋太、ニンジンが残っているじゃないか」

洋太に嫌われないようにしているためか、パパの言葉は優しい。

「だって、ニンジンは変な味がするもん」

「確かに、ニンジンは独特の味がするが、……！！！」

パパは言いながら早苗ママからご飯を受け取るが、早苗ママの殺気ある眼力を感じ、話をやめてご飯を口に入れ、間を見計らってか

ら言い直した。

「まあ、とにかくだ。ニンジンは食べたほうが身のためだぞ」

「パパも、ママと同じ事を言う」

パパという味方を得られなかった洋太はニンジンだけを残して席を立った。

「洋太、ニンジンが残ってる」

「いない」

早苗ママは、何回言ってもニンジンを食べようとしない洋太の態度を見て、これ以上は無駄だと思いニンジンを勧めるのを諦めた。

そして就寝時^{しゅうしんじ}。早苗ママは台所で日記をつける。

月 日 曜日

今日も洋太はニンジンを食べなかった

しかし、ハンバーグに混ぜたピーマンとタマネギとシイタケとイワシは気づかずに食べる

やはり、好きな肉と混ぜるのが効果的みたい

あと、濡り潰し^{すじつぶし}瀘^ししてからドレッシングに混ぜたグリーンピースにも気づかずに食べる

今後ドレッシングに混入する方法も期待できそう

早苗ママが日記をつけていると、風呂上りのトランクス姿でパパがやって来た。バスタオルを肩にかけて早苗ママの日記を覗く^{のぞ}く。

「日記をつけているんだ」

「どうしても洋太がニンジンを食べないのよね」

「洋太も、昔の僕みたいに、彼女ができればニンジンを食べるようになるさ」

「そうだといいんだけど」

日記を書いている早苗ママにパパは後ろから抱きつく。

「僕は、嫌いなものが入っていても、君の手作り弁当だけは頑張つて食べたからね」

パパは早苗ママの耳を噛む^か。

「ああん、ダメ。洋太が起きちゃうわ」

早苗ママは、パパの口を指で押さえる。

パパは早苗ママの指を舐めながら言う^な。

「研究室で才女と呼ばれていた君を、僕は独り占めしたくて家庭に入れてしまった。そんな僕を恨んでないかい？」^{うら}

「恨んでないわ。だって、ここでも実験ができるもの。料理材料を使つて」

早苗ママは「舐めたらダメ」とパパの口を軽く摘む^{つま}。

パパは顔を横に動かして早苗ママの指を外す。

「洋太の次は、僕と夜の実験をして欲しいな」

どうしようかなと、早苗ママはパパの顔をじつと見て考える。

早苗ママの瞳は、研究室で働いていた頃と変わらず、キラキラと輝いて主婦の生活がいかに満足なものか、パパに告げている。

「日記をもう少し書いたら寝室に行くわ」

「待つてるから、早く来てくれよ」

パパは早苗ママに軽く口付けをすると去って行った。

早苗ママは、途中で止まっていた日記を書き始める。

今夜のパパ

興奮度 - 闘牛並み

心拍 - 鼓膜を刺激するほど音が大きく早め。

トランクス内 - 発汗と膨張有り

要因 - パジャマから透けて見えるレースの下着と入浴後の香り、ハンバーグに入れたニンニクと精力増強効果のある漢方薬の、相乗効果があったと思われる

目的達成度 -

その後のパパの様子 -

「最後の2つは、あとになるわね」

早苗ママは、書いた内容を再確認してから日記帳を閉じた。

日記帳の表紙には、こう書いてある。

「早苗ママの実験簿」と。

短気

会社のお昼休み。

部長は頭を痛めていた。

でも病気や疾患の頭痛じゃないので、昼食のカツ丼はよく食べる。

「新しく主任になった山田。あいつちよつと短気じゃないか？」

部長と肩を並べて座っている課長のランチはエビフライ定食だ。

「俺の時もそうでしたが、主任になると仕事が増えるわ、部下は文句を言ってくるわで、大変なんですよ」

「大変なのは、わしも通って来た人生だから分かるが。それでも、カリカリし過ぎだと思っぞ。あいつ」

部長はカツが入った頬を膨らませながら言った。

あいつと呼ばれた山田は、もうすぐ30になる。

部下だった時、辛く当たってくる上司にも耐え、妻子のために仕事一筋に頑張ってきた。

なのに、最近の若い奴らときたら。

仕事を教えれば、できないと言い、

頑張れと励ませば、言うのは簡単だと言い、

なぜできないのかと尋ねれば、会社を辞めますと言う。

我が子はまだ幼く、確かに人間一人を一人前に育てた経験は無い。

それをどうして、結婚もしていない若い奴らに、

人の育て方が悪いと陰で言われなければならないのか。

山田には全く分からなかった。

山田は社員食堂で一人で昼食を食べていた。

仲良しの同僚は営業で外回りのため、主任になった山田とのすれ違いが多くなり、

なかなか食事と一緒にできない。

最近は人の温かみに触れる事も縁遠くなり、

ランチを提供してくれる料理場のおばちゃんが、今の唯一の山田の話し相手だった。

そんな山田の隣に、缶コーヒーを持った部長が腰を下ろした。

「なんだ山田、一人で食事か？」

「はい」

山田の返事は、元気がない。

「どうだ、今度の日曜に、釣りでも行かんか？」

部長は、のんびり釣りでもして山田の短気が少しでもよくなればいいと思い、誘っているようだ。

「釣りですか。俺、釣りはしたことがなくて、釣り道具持っていないですよ」

「それくらい貸してやる。どうせ日曜は空いているんだろ？」

「はあ」

「なら、決まりだ。日曜日、朝6時にわしが迎えに行く。温かい^{かつ}恰好^{こつ}をして待っているんだぞ」

「朝の6時ですか？」

「そうだ。釣りで朝の6時は遅いくらいだ。いいか、必ず起きて待っているんだぞ。これは上司命令だ」

部長は山田の肩に手を置いて椅子から立ち上がった。

テーブルにある缶コーヒーを手にしたところで思い出したように言う。

「そつえば、弁当もいるからな。作ってもらつか、弁当代忘れるなよ」

部長は言っただけ言って、課長がいるテーブルに戻って行った。

山田は余計に頭を悩ませる。

平日は言う事を聞かない部下のお守り^もをして、休日は遊び好きの上司のお守り^もをしなければならぬ。

給料の主任手当では一月5000円。

休日出勤の日当にもなりやしない。

主任職はなんて損なんだ。と。

時は、悩みを抱える山田を無理やり日曜日へと引き摺^ずって進んでいく。

山田の短気は部長に声をかけられた事もあり、多少は自重して部下に向かなくなったが、

山田の心は発散できない鬱憤^{うつぶん}が溜まり、

人のいない所へ移動して苛立つ自分との自問自答が多くなり、短気は一層酷^{いっそうひど}くなっていった。

そして、日曜日がやってきた。

山田は妻子よりも早く起き上がった。

時計を見ると5時半。

休みのこんな朝早くに、妻が起きている訳がない。

朝食を食べずに山田は出かける支度をする。

今は4月。朝はまだ寒い。

山田は防寒着を身にまとう。

ふらふらと歩き、部長が迎えに来る手前、6時より10分早い、5時50分に玄関を出た。

部長を待たせるより、自分が早めに外に出て部長を待とうと思ったのだ。

山田は真面目で上司思いの性格のようだ。

しかし、部長はすでに山田宅の玄関に車をつけて待っていた。

車の窓ガラスを下ろして顔を出す。

「おはよう、起きたようだな。早く車に乗れ」

部長は60近いのに早朝から元気だ。

山田は眠くて頷く事しかできない。

山田が車に乗り込むと、部長はすぐに車を走らせた。

「釣りはな、朝の場所取りが肝心なんだ。今日はいつもより遅いかな、いい場所は陣取れないかもしれん」

普段の部長はもっと早くから釣りに出かけているようだ。

「部長は早起きなんですね」

「釣りの時はな。あっはっはっは」

部長は一人で笑う。

山田は隣で大きな欠伸あくびをした。

釣り場へ行く途中、コンビニに寄ってもらい、山田は朝食と昼食を買う。

釣り場に到着してからの山田は、部長が貸してくれたゴム長靴をはいて、部長のあとに続いて歩いた。

部長は脇に釣り道具を抱えて、

振り向いて山田を見ながら器用に歩いて行く。

「部長、荷物持つの、手伝います」

「いやいい。わしにとって釣り道具は体の一部なんだ。

それに高価なものもあるしな。あっはっはっは」

部長は笑って言うが、山田にはどこが笑える部分なのかが分からない。

部長は瞳を子供のように輝かせて指をさす。

「ここはな、初心者用の釣り堀だから、山田でもいけるぞ」

何がどういけるのだろうか？

部長の言葉は変だが、言いたい事はなんとなく分かる。

山田が先を見ると、池が二つある。

両方の池はすでに釣り客が来ていて、池の中に釣り糸をたらしめている。

部長の言うとおり、6時の出発では、あいている釣り場所は少なかった。

「手前の池が雑魚。奥がヘラブナだ」

部長は入り口にいるオヤジに二人分の池の利用料を支払うと中に入った。

利用料は部長のおごりだ。

「ヘラブナだぞ。ヘラブナ」

部長はヘラブナの釣り堀へ行きたいようだ。

山田は「はい」と返事をして部長についていく。

ヘラブナの釣り堀に行くと、部長は池の周りを回ってよい釣り場

所を探していく。

先に来て釣り糸をたらしめているオヤジたちが振り返って山田を見る。

オヤジたちの視線が山田の体に刺さっているようで、山田の姿が痛々しく見える。

「山田は初心者だからな、いい場所が見つかるといいんだが。あっはっはっは」

部長は笑いながら親切に釣り場所を探してくれているのだが、それが上級者の釣りの邪魔にならないかと山田は内心冷や冷やした。

釣り場所は池を半周もしないうちに見つかった。

「ここにしよう」

部長は釣り道具を組み立てていく。

「これが山田のだ」

山田は釣り竿しんぼうを受け取る。

竿さおは思った以上に長く、竿の先端には糸がついており、

糸の途中には鉛筆のような細長い浮きがあり、糸の終わりには針が2、3個ついている。

「いいか。そのまま持っていてくれ」

部長は針に練りエサをつけると、山田から竿を受け取った。

「ここがお前の場所だ。いいか浮きをしっかりと見るんだぞ」

部長は釣り台に竿をしっかりと固定した。

「あとは座って待つだけだ。浮きの動きだけは絶対に見る。浮きが引いたら竿を上げるんだ。いいな」

山田は、部長が持ってきた小さな椅子に腰掛けて、浮きを見る事になった。

部長も隣の釣り台で糸をたらす。

それから無言で山田はずっと浮きを見ていた。

しばらくして、部長が立ち上がり、山田の釣り竿を掴んだ。

「ダメじゃないか。エサを食われているぞ」

山田に竿を持たせ、針にエサをつける。

「いいか、山田。よく聞け。ヘラブナ釣りはな、浮きの上がり具合を見て、水中のエサの減り具合を知り、浮きの上下の動きでヘラブナの食いつき加減を見るんだ」

部長は竿を釣り台に固定する。

「様々な浮きの動きを見て、相手がどうゆう状況なのかを判断をしてアクションを起こす。これはだな、人と接する時と同じなんだ。ヘラブナにも性格や体調があるからな、食いつきのいい奴もおれば、悪い奴もいる。ビッグな奴ほどスレいてな、なかなか食いつかん」

山田は、雄弁ゆうべんになった部長の話を聞いて、目が覚めた。

部長は衰おとろえのない眼差まなざしを浮きに向け話を続ける。

「だったら、釣りの時刻や水温、天気もヘラブナにとってよい環境にしてやればいい。場合によっては服装も、ヘラブナがストレスを感じないようなのを選んで着ていけばいい。試行錯誤しこうかくごをし、デカイ相手、客や有能な部下を釣り上げた時、ビジネスマンのわしらは達成感と共に、デカイ相手との至福の時を得られるのさ」

部長は山田の背中を叩く。

「職場でも様々な奴がいて、その中で自分の仕事をしながら部下の面倒をみていくのはしんどいと思う。そうなったら焦らず職場でのんびり釣りでもする事だ」

そう言う部長は自分の釣り台に戻って行った。

山田から見て、会社での部長は、

椅子にのんびり腰掛けて書類に目を通し、

時間がきたら接待で酒を飲んでいるだけだと思っていた。

部長がタバコを吹かしている時は、

目の焦点があつてなくて幽体離脱ゆうたいりだつをしている時もある。

そんな部長が、そこまで考えながら動いているとは思ひもよらなかった。

行き詰った時、人はどうしても立ち止まってしまう。

生きていくのが辛くなつて打開策だかいさくも考えられなくなってくる。

なのに、部長はどうしてそこまで考えをめぐらせて先に進む事ができるのだろうか。

山田はある結論にたどり着く。

部長こそが真の短気なんだと。

短気だから、自分の足場が崩れて、居場所が無くなっても、じつとできず、考えまくり、動き回る。

座ってヘラブナ釣りをしている今も、部長は短気を起こして、ヘラブナを釣るためにどうしようか考え続けているんだと。

山田が見ている前で、部長は自分の釣り竿を持ち上げる。

「エサを取られた。くっそぉー」

悔しそうな声をあげた部長を見て、山田は笑いを漏らす。

人の愛嬌あいぎょうを感じて、心の底から笑ったのはいつだったか。

立ち上がって部長の所へ行く。

「部長、俺にエサをつけさせて下さい」

山田は部長の釣り針にエサをつける。

そして気づく。吹っ切れて自分の心が軽くなっている事に。

それでも、山田はまだ気づいていない事がる。

自分の短気によって、部長の心を釣り上げた事に。

星の王子様

「パソコン書類の訂正線は、アスタリスクを使っているんですね」

と話すのは、新入社員の里中。大学卒業後に入社した彼は、まだ合コンに行った事がない。勉強一筋の真面目な性格でアルコールも満足に飲めず、新人歓迎会の時には、始まった早々に真っ赤な顔をして畳の上で横になっていた。

里中の隣の机にいるのは海野。入社10年目の彼は30代の年齢で、仕事が終わると妻に電話をして「仕事の残業だ」「得意先回り」だと言つて、なんの罪悪感も無く合コンに参加していた。

「昔は、油性ボールペンで伝票に書いて、訂正の時は二重線を引いて自分の訂正印を押していたんだよな」

今は仕事なので、海野はパソコンで打ち出された伝票を順番に見て間違いがないかチェックをする。

ここは玩具会社の出庫場。パートで働く人々が倉庫内を行き来している。

そのすみっこにある事務所で、里中と海野は本社から送られてくる発注内容を見ながら、伝票の発行や足りなかった商品の追加発注などをしていた。

海野は片手でパソコンの入力をしながら、隣にいる里中に言った。

「里中。今度、俺と合コンに行かないか？」

里中は覚えたての仕事に戸惑いながら、どこまで伝票を処理したのか忘れないように付箋をつけてから答えた。

「僕は合コンに行った事がないんですよ。それでもいいですか？」

「合コンに行った事がないのか！」

海野の声は驚いているが、表情は冷静で滑らかに指を動かしてキーボードを叩いている。

里中は笑顔だが視線を下げて言う。

「彼女がいたので、合コンに行く機会がなくて」

海野は指を動かしながら里中を見た。

「結婚するのか？」

「別れました。真面目な俺はつまらないらしくって。フラれました。一ヶ月前です」

里中はパソコンに向き直ると入力途中の伝票を持ち上げた。これで会話は途絶えると思ったからだ。

だが会話は止まらなかった。

今度は海野が仕事の手を止めて里中を見る。

「だったら遠慮なく合コンに行けるな」

「合コンですか……」

里中の返事は芳しくない。

海野には里中の沈んだ様子の理由がなんとなく分かる。

「彼女が忘れられないのか？」

「まあ、そんなところです」

里中はキーボードの上に手をそつと置いた。きつと今の里中は、楽しかった彼女との日々を思い出しているのだろう。

若い時はそういうもんだ。と海野が里中を眺めていると、里中は静かにため息を吐いてから、伝票を机に放り投げた。周りに聞こえないように声を絞り出して言う。

「彼女。僕に言ったんですよ」

「なつ、何をだ？」

急な暴露話に、海野は身構える。

里中は椅子を回転させて海野に向き直り拳を膝の上に置く。

「嫌いじゃないけど別れる。って。恋愛感情が無くなったただけなの。だから友達に戻りましょう。って。そういうの有りですか？」

「それはだな……」

海野は、その先の内容を里中に伝える事はできなかった。その女は、本命の彼氏ができるまで里中を繋ぎ役にした。なんて。

海野が加減をして言葉を止めるが、里中は既に仕事が手につかないほど意気消沈してしまっている。

今、里中の相手になってやれば、詳細な別れ話は聞けるが、里中が泣かない保証はない。

海野は、里中に同情しつつ、しかしここは社内なので、また仕事を始めるために指を動かす。

「別れの1つや2つ、どうって事ないだろ。別れがあるから出会いがあるんだ」

「でも、あんな別れ方ないですよ」

「離婚した俺と比べると、まだ穏やかに分かれた方だと思うが」

「海野さん、離婚暦あるんですか」

皮肉な事だが、この不幸話で里中に元気が戻る。

海野は冷静な表情で伝票を見ながら話す。

「今の妻は二人目なんだ。戸籍はパソコン入力で作成されるから、この伝票のように、一人目の妻の名前はアスタリスクが打ち込まれて、二人目の妻の名前が入力されている」

「戸籍の訂正もアスタリスクなんですね」

里中也伝票内にあるアスタリスクで訂正された箇所を見る。

海野は一束分の伝票の仕事を終えて次の束へ手を伸ばす。

「バツイチの時代は終わっていると思うが、アスタリスクになった今も、バツイチはみんなが言う」

里中は話題が変わったこともあり、またパソコンに向き直って仕事を始める。

「せっかくアスタリスクになったんだから、バツイチはやめて、星イチにしたらどうですかね？ 星が2つ、3つと増えたら、三つ星と呼んでみたりして。五つ星になったら恰好良くないですか？ 経験豊富っていう意味で、理に適っていると思うんですが」

「離婚した俺の美味^{おい}しさをアピールしてどうすんだ」

海野は笑い出した。離婚の後悔や悲しさは、今は思い出せないほど消えてしまっているようで、海野は笑いながら付け加えた。

「離婚を1回している俺は、まだ星一つだから、星の王子様がいいな」

「星の王子……さま。ですか……」

里中の笑顔が凍りつく。

海野は先輩。

先輩への尊敬の念は必要だが「いくらなんでも、30過ぎで、星の王子様はないだろ」と思う里中がそこにいた。

夏祭りが終わっても続くものは？

夏祭りが終わった。

人々は夜店を覗きながら家へと足を進める。

二人もまた夜店を見ながら歩いていたが、何を買うでもなく、会話をするのでもなく、ただ黙々と一緒に歩いていた。

夜店はなくなり、今度は住宅が並ぶ道を歩いて行く。

前後を歩いている家族やカップルは、会話をしながら歩き、じゃれ合ってくついたり離れたりしている。

それに比べて二人ときたら、くつつく訳でもなく離れる訳でもなく同じ距離を保ちながら無言で歩き続けていた。

二人はまだ若く、互いの距離を見る限りまだ付き合っ間もないカップルのようだ。

10分ほど歩き続けて、前後にいた家族やカップルがいなくなつた頃、やっと男が口を開いた。

「宿題どのくらい進んだ？」

女は答える。

「練習問題は全部やったけど、読書感想文はまだ。どの本にしようか迷ってしまって」

二人は学生のような。

「課題図書にすればいいじゃん」

男は持っていた水風船の結びめ部分を持って水風船を振り回す。

女は袋に入ったりリング飴を手にはぐら提げている。

「課題図書が5冊もあるから迷っているの」

「迷った時は一番最初のにすれば楽じゃね？」

それを聞いて女は浴衣の下にある下駄でアスファルトを強めに踏んだ。カラコロンと景気のよい音がする。

「単純ね」

女は、髪をまとめてゴムで留めて上に上げている。髪を結うほどではないが、浴衣に合うように彼女なりに髪をまとめ上げたようだ。顔はほんのりと薄く化粧をしている。

「単純って言うなよ。感じ悪いな」

男も浴衣を着ている。ただし、頭は坊主で体育系のクラブをしている雰囲気だ。

どうやら二人は中学生のようだ。

女は急に俯いた。ゴムで留めてある髪が上下に動く。

「ごめん」

しおらしく謝る彼女に、男は急にたじろいだ。

「謝るなって。今日のお前。なんか、らしくない」

女としては聞きたくなかった言葉のようで、彼女の下駄は動きを止めてしまう。

「だって、嫌われたくないんだもん」

「嫌いになる訳ないじゃん。なんでそっちの考えになるの？」

男の下駄も止まった。

「だって」

街灯の下で見る彼女の瞳はキラキラと輝いて見える。

男はドキッとした思いを飲み込んでから彼女の言葉を繰り返す。

「だって。何？」

「だって、ともあき 知明はさあー」

女は口を尖らせてから言葉を続けた。

「ほかの女ばかり見て、私を見てくれないじゃない」

「それは」

男は横を向いた。また水風船を振り回す。そして呟くようにぼそりと言った。

「沙弥香さやかが化粧なんかしてくるからだよ」

女は一步前に出る。

「え？ 聞こえなかった。なんて言ったの？」

「もう言わない」

男は歩き出す。

女は男を追いかける。

「なんて言ったのか教えてよ」

「ダメ。教えない」

「なんでよ？」

女が男に追いついて浴衣の袖を掴んだ時、男は振り向いて女に顔を近づけた。

女にとっては突然。男にとっては必然。一瞬の出来事だったが、互いの唇が触れ合ったのは言うまでもない。

硬直した女に男は言う。

「きれいになつたお前が悪いんだ」
と。

そろそろ大人になりなさい

陽子は今年で40歳になる。結婚をせず会社員として事務職に従事している。

陽子は40歳の今でも独身男性が一目置くほど美しい女性だった。性格も朗らかで愛想がよく、冗談や冷やかしを言われても、適当に返事をして職場仲間や友人たちと一緒に笑ったりもする。

そういう器量よしの陽子は職場の上司からも好かれ「どうだ？」と条件の良い見合い相手を紹介された事もある。近所や親戚からの見合い話も、40歳になった今でも尽きる事はない。

しかし、どんなに条件が良くても陽子が首を縦に振る事はなかった。

なぜなら、陽子は誰にも言えない趣味があるからだ。それはメカキャラクターの収集だった。

陽子の部屋には、寺沢武一の『コブラ』ゆうきまさみの『機動警察パトレイバー』土郎正宗の『攻殻機動隊シリーズ』永野護『ファイブスター物語』そしていろいろな作者によって書き下ろされている『ガンダムシリーズ』『マクロスシリーズ』などのコミックや小説が棚に並んでいる。

最近のものになると『エヴァンゲリオン』『蒼穹のファフナー』『創聖のアクエリオン』『天元突破グレンラガン』『鉄のラインバレル』なども棚に入っている。

陽子のメカ系キャラクターのコレクションはまだある。『鉄人28号』『マグマ大使』『ゲッターロボ』『マジンガーZシリーズ』『UFOロボグレンダイザー』『SF西遊記スタージンガー』『無敵超人ザンボット3』『無敵鋼人ダイターン3』『無敵ロボトライダーG7』『最強ロボダイオージヤ』『戦闘メカザブングル』『聖戦士ダンバイン』『重戦機エルガイム』『機甲戦記ドラグラー』『装甲騎兵ボトムズ』など。メカ系のビデオ・DVDが棚に入っているのも、陽子にとっては当たり前なのである。

とにかく、陽子はメカ系キャラクターが大好きなオタクだった。

本日の朝も陽子はメカ系キャラクターのコレクションに囲まれて気持ちよく目覚めた。

陽子は棚に入っているガンダムプラモデルに「おはよう」の挨拶をする。もちろん陽子の手作りである。『ガルディーン』などほかのプラモデルやフィギュアにも挨拶をする。

しかし、いくらメカ系キャラクターが好きだと言っても、会社へ行く時にメカ系のコミックや小説を電車の中で読むと、周囲から好奇の視線を浴びてしまい落ち着いて読む事ができない。

陽子は代わりに最近知った「いしいひさいち」の文庫サイズの本をカバンに入れた。当然コミックだとはれないようにチェック模様の包装紙でカバーがしてある。

何食わぬ顔をして朝食を食べに来た陽子を見た母親は、目をキラリと光らせた。

「また本を持つてる。それマンガでしょ？ 電車の中で読むつもり

？　いつまで経っても子供なんだから」

母親は昔で言うキャリアウーマンだった。現在は定年退職をしているが、今も会社に残り準社員として働いている。働きながらの子育てだったが、陽子がメカキャラクターを好きなのは母親として当然知っている。陽子がなかなか結婚したがない理由も、嫁ぎ先へメカコレクションを持っていけないからだという陽子の思いも理解している。だが、自分が死んだ時の事を考えると、親としてメカキヤラを手放せず一人身の女性のままの陽子を残すのはたえられない。

母親は、陽子がメカキヤラコレクションを手放して家庭が持てる女性になるように促す事にした。

「もう40歳なんだから、そろそろ大人になりなさい。今日からその本はここに置いて仕事に行くように。いいわね」

「お母さん……」

娘思いの母親の心内を知っている陽子としては、母への言い訳を躊躇ってしまう。

陽子が沈んだ表情をしていると、母親は自分の通勤カバンから本を取り出した。母親の本には布地にスミレの刺繍が施された上品な趣のカバーがしてある。

「陽子。代わりにお母さんの本を貸してあげるから、暫くはこれを読んでいなさい。いいわね」

「はい」

陽子は、いいひさいちの本をテーブルに置いて、母親から渡された本をカバンの中に入れた。

その後、陽子は電車の中で本を開く。

母親から渡された本は、池波正太郎原作、久保田千太郎脚色、さいとうたかお作画のコミック「鬼平犯科帳」だった。

メカキヤラに搭乗する爽やかでハンサムな登場人物とは違い、「さいとうたかお」のは凄味を帯びた人間臭い渋めの登場人物が多かった。通勤時に読むいいひさいちのコミカルで軽い調子も無く、鬼平の周りで起こる人情劇は、陽子が今まで読んできたコミック中では一番の重さがあった。

「これが大人になるって事？」

母の躰けに対し、陽子の心の中で葛藤が起こったのは言うまでもない。

真実の愛

これは、日本の大富豪と呼ばれた故田村雄二郎氏92歳の遺言である。

私の妻、亜矢子へ

私は、君に会うまで、いろいろな女性と出会い別れを繰り返してきた。

最初の女性とは恋愛結婚だった。あるところのご令嬢だった彼女は、とても慎ましやかな性格だった。衝動買い以外は。

次の女性は、知人の紹介で付き合い始め、結婚するに至った。料理の上手な彼女は、嫌がりもせず魚を捌き、泥にまみれた野菜の皮も器用に剥いた。もちろん、私以外の男性も、捌いたり、剥いたり、料理したのは言うまでもない。

次の女性は無口だった。とても大人しくフランス人形のように綺麗な女性だった。お陰で、私が彼女の浮気に気付くのに時間がかかったし、探偵を雇う費用もかかった。

次の女性は男勝りでキャリアウーマンだった。会社をいくつも持ち、年収も多く、仕事好きだったため、彼女は一度も浮気をしなかった。お陰で、暇を持て余した私が浮気をしてしまった。

次の女性は色白で脚線美の持ち主だった。雪国で育ったという彼女の肌は、肌理が細かくてすべすべしていた。夜のサービスもよく、男が喜ぶツボを知り尽くしていた。あとになって分かった事だが、

彼女は男性だった。

次の女性は子犬が好きだった。私と出会った時には既にチワワを飼っていて、私とデートの時も、いつもチワワを連れて歩いていた。私はこの女性なら今度こそ大丈夫だと思い結婚したが、彼女はこの私にも首輪をつけたのである。

次の女性は幼馴染の女友達を大切にしていた。その幼馴染はよく我が家に遊びに来た。彼女は幼馴染と一緒に料理を作り、その料理を食べながら酒を片手にダンスをし、私も喜んで一緒に踊り騒いだ。そして私が酔いつぶれて寝入ったあとも、彼女はその幼馴染とベッドの上で踊ったのである。

次の女性は、いや、もうやめておこつ。

私の女性遍歴は、亜矢子も知っているだろうから。

私が亜矢子に言いたかったのは、君は最後の最後に出会えた私の真の妻だった。って事だ。

亜矢子。君だけが私を裏切らずに妻として尽くしてくれた。

喧嘩をした事もあったが、君はいつも私の目の届く所にいてくれて、衝動買いもせず、奇行もなく、一度も浮気をしなかった。

私は、妻として尽くしてくれた亜矢子に、心の底から感謝している。

だから私は亜矢子に一番高価な遺産を送ろうと思う。

それは私の真実の愛だ。

亜矢子が私に捧げてくれた愛と同じように、私も真実の愛を亜矢子に捧げようと思う。

私は、この数年、亜矢子が気に入る遺産はなんなのか思案してきた。

タヒチの私有地もあった。アフリカ産の巨大ピンクダイヤもあった。現金のほうがいのかとも考えた。

しかしやはり、亜矢子の言うとおり、愛に勝るものはないと、私は気付いたのだ。

私の真実の愛は、誰のものでもない。亜矢子だけのものだ。

愛しているよ。亜矢子。

いつまでも、いつまでも、墓に入ってから、私の君への愛は変わらないだろう。

田村雄二郎

この遺言書を弁護士から手渡された46歳の亜矢子は、読み終えたあとに、卒倒したという。

またネ

桜子は、ピンクローズの口紅が似合う21歳の美人大学生。

大学の講義が無い日は、クリーニング店の受付嬢としてアルバイトをしている。

一緒にクリーニング店で働く江美も18歳の大学生で、彼女は彼氏がいるにも係わらず、ほかの若い男に目が無く、同じ歳頃の男性客が来店すると、男好きの好奇心から受け取った男性客のクリーニングの衣類を入念にチェックしていた。

「甘い香水の匂いがする。女性用の香水かな」

「またお客さんの衣類の匂いを嗅いでる。やめなさいって注意しているのに、その癖は直らないわね」

好みの男性客の衣類の匂いを嗅ぐ江美の癖を、心よく思わない桜子は顔をしかめた。

江美は、男性客が置いていったスポンの匂いを嗅ぎながら言った。

「桜子先輩。結婚を考えて付き合うなら、絶対に相手の体臭は重要です」

「体臭は、食べ物や香水で変えられるじゃない。そんなに重要だとは思わないけど」

桜子はクリーニングの伝票を整理しながら言う。

「えー。そうかなー」

江美は言ってから口を尖らせて男性客のスポンを手放した。

桜子は高校生の時からクリーニング店の受付嬢を勤めている。おこづかい目当てで働いている桜子は、来店の男性客には興味が無くもっぱらアクセサリーや流行の衣類の購入費にバイト代をあてている。受付嬢5年目になる桜子は、真面目で丁寧な仕事振りを店長に認められて、最近は閉店の作業を一人で切り盛りするようになっていた。

そんな桜子にある転機が訪れた。恋愛に関心が無かった桜子の心を撃ち抜いた男性客が現れたのだ。

その客はサラリーマン風の若い男性で、俳優の小泉孝太郎似の爽やかタイプだった。歳は30前後に見える。

「初めてなんですが」

「初めて当店をご利用されるお客様ですね。ご来店頂き有難うございます。ポイントが貯まるお客様カードをお作り致しますので、こちらの用紙にお客様のお名前とご住所とお電話番号をお願い致します」

「分かりました」

男性客は桜子からボールペンを受け取ると早速用紙に記入を始めた。

紙の上をすらすらと滑って動くボールペン。

桜子は目を皿のようにして男性客の個人情報を見た。

彼は、氏名欄に池田正治と書いた。

池田は個人情報の記入を終えるとビジネススーツの上下をテーブルに置いた。

「このクリーニングをお願いします」

「畏まりました。ビジネススーツの上下ですね。合計で千五百円になります」

桜子はときめきを覚えながらも、慣れた手つきでビジネススーツを受け取る。

「仕上がりは、明日の夕方5時になります」

池田は清算を済ませて印字されたレシートを受け取ると店を出て行った。

桜子と江美は「有難うございました」と言っつて同時に頭を下げて池田を見送った。

池田が去ってから、桜子と江美は顔を見合わせた。

最初に口を開いたのは江美だった。

「桜子先輩。気付きました？ あの人。俳優の小泉孝太郎にそっく

りだったあー」

興奮が収まらないらしく江美の声のトーンは高めだ。

「ホント。似てたよね。声もそれっぽくない？」

桜子も芸能人に似ている池田を見て興奮気味のようだ。

「声も似てた。似てた」

「似てたよね」

暫くの間、小泉孝太郎似の池田の話題が続き、閉店1時間前になつて江美はいつもの癖で池田のビジネススーツを手を取った。

「小泉君は、どんな体臭かなあー」

江美は早速ビジネススーツの匂いを嗅ぐ。

桜子はまた江美の悪い癖が始まったかと怪訝な表情をした。

「また匂いを嗅いでる。やめなさいって言ってるのに」

「でも知りたいじゃないですか。小泉孝太郎似の彼の匂いを」

しかし、池田のビジネススーツは、江美の期待を裏切ったようで、江美はつまらなそうな表情をしてビジネススーツを手放した。

「新調したての匂いしかない。つまんないのぉー」

「ほらごらん。神様だつて、やめなさいって言ってるのよ。もう、お客様の衣類の匂いを嗅ぐのは、やめるのよ」

桜子は先輩として江美を嗜めた。

江美はまた口を尖らせて「はぁーい」と返事をする、バイト終了の時刻になった事もあり、先輩の桜子に閉店作業の引継ぎをして帰って行った。

江美が店を出てから、約1時間後の夜の7時でクリーニング店は閉店する。

桜子は店のシャッターを下げ、レジの1日の締めを終えると帰り支度を始めた。

池田正治という名の小泉孝太郎似のサラリーマン。

テレビで俳優の小泉孝太郎を観てもなんとも思わなかったのに、なぜ池田正治を見た瞬間、桜子の心臓は高鳴ったのだろうか。

桜子は、天使のいたずらで胸に刺さった恋の矢に戸惑いを覚えていた。

池田が、仕上がったビジネススーツを取りに来るのは明日だろうか。それとも明後日だろうか。仕事が忙しいなら一週間後になるかもしれない。次に池田に会えるのはいつになるのか。

桜子の本音は、今回に限り、なんの恥じらいも無く池田の体臭を知りたがる江美の行動が羨ましかった。

桜子はやつと気付いたのだ。相手を好きになると、相手の事をもっと知りたくなると。

店のシャッターを下げてしまえば、誰からも見られない自分だけの空間できる。

桜子は池田のビジネススーツに手を伸ばす。しかしやはり、真面目な性格のせいで、必要もなくお客様である池田のビジネススーツを触るような不埒な真似はできない。桜子は手を引いた。

「やっぱり、やってはいけない事なのよ。人目が無くても」

桜子は池田のビジネススーツを見て見ぬ振りをして、カバンを掴んで店を出ようとした。

でも、どうしても思いが断ち切れなくて、桜子は振り返って池田のビジネススーツを見た。

池田のビジネススーツは、桜子呼んでいた。

桜子は、池田のビジネススーツに呼ばれているような気がしたのである。

桜子は、憑依されたように虚ろな表情でビジネススーツに歩み寄る。

カバンを手放すと、池田のビジネススーツを両手で掴んだ。

池田のビジネススーツは、絹100%で織られたものだった。裏地は綿とポリエステル混合生地になっている。

手触りの良い絹の感触に、桜子は今までに感じた事の無い興奮を覚えた。口から吐息が出ているが、桜子自身は気づいていない。

「ああー。これが、池田正治さんの……。男の人の……」

喘ぎ声に似た感嘆を口から漏らし、桜子は恍惚とした表情でビジネススーツを握る。

そして次に、裁縫道具からメジャーを取り出した。

「池田さんの股下は、79センチ。池田さんは、思ったより脚が長い」

桜子は、まだ池田のビジネススーツの股の部分に触り続けていた。

そう。桜子は、股下フェチだったのだ。

今回の池田の登場が切っ掛けで、桜子の深層意識に眠っていた股下フェチが芽を出し、桜子は覚醒したのだ。

それから桜子の股下いじりは数分間続き、満足した桜子は、絹100%の股下の感触を胸に秘め、家路についた。

次の日の閉店近く、池田は洗いあがったビジネススーツを取りに来た。

桜子は江美より早く店頭に立ち、池田にビジネススーツを手渡した。

「ビジネススーツの上下ですね。仕上がっております。どうぞ」

池田は、小泉孝太郎似の爽やか笑顔で仕上がったビジネススーツを受け取った。

「有難う」

「ご来店、有難うございました」

桜子と江美は、同時に頭を下げた。

桜子の長年勤めてきた勘が、桜子に告げる。池田は、次回のクリーニングも、うちの店に依頼するだろうと。

桜子は、見送りながら心の中で池田に言った。

「またネ。池田さん」

またネ（後書き）

「ざ・ほもさびえんす」を読んで頂き有り難うございます。
楽しんでいただけたでしょうか？

突然ですが、また改名する事になりました。

理由はいくつかありますが、

現在の作者名にある雨の部分がなくさないといけないようで、

改名後は雨が付かない作者名になる予定です。

次に作品でお会いする時は、違う作者名になっているかもしれないかもしれませんが、

今後どうか宜しくお願い致します。

神経質（前書き）

前回の予告どおり、
作者名を『雪鈴るな』から『羽村奈留』に変更しました。
皆さま、今後どうか宜しくお願い致します。

神経質

子供が成人し働くようになると、育児がなくなり、親は暇を持て余すようになる。

例え趣味があつたとしても毎日同じことをしていれば飽きてくる。男親はまだいい。平日は仕事があるから。

しかし専業主婦として暮らしてきた女親はそうはいかない。

パートやアルバイトで働こうとしても、専業主婦の思考はそう簡単に雇われモードにはならないし、衰えた体もなかなか労働についていけないからだ。

50歳近い瑚沙子（トクト）は、毎日をボーっとして暮らす事が多くなっていた。

たまに来る友人との雑談は楽しいが、事件などの新しい話題がないと、雑談も単調になってくる。

スポーツジムに通っているが、それも飽きてしまつて最近は通う回数も減ってきている。

昼間は独りで韓国ドラマを眺め、日が暮れば家族の夕食を作り、夫子供が帰れば一緒に食事をして、入浴後は寝るだけの毎日だ。

就寝時、瑚沙子は鏡を見ながら顔にコールドクリームを厚塗りする。歳を重ねた肌は、待っていましたとばかりにコールドクリームの水分と栄養を補給していく。

瑚沙子の後ろでは、仕事で疲れた夫が既に高鼾で眠っている。

今夜も何事もなく布団に入って眠るだけ。

そう思いながら瑚沙子は眠りについた。

いつだろうか。

瑚沙子は気配を感じて目を覚ました。周りはまだ真っ暗でよく見えない。そして焦る。体が動かないのだ。隣で寝ている夫を起こそうとしても、声も出せない。

一体自分の身に何が起きたというのか！？

手足の感覚はある。しかし関節を曲げる事ができない。呼吸もできる。でも口は開かないし喉にも力が入らないため声が出せない。首も動かせない。脈の振動も感じない。こんな状態で自分は生きているのだろうか。瑚沙子は、動かない体をなんとかしようとがんばった。

どのくらいの間もがいていたのだろうか。首が動くようになったと思った時、重たかった体が急に軽くなり、瑚沙子は起き上がった。「あなた。起きて！ 大変なの！！」

「ん？」

夫の反応はあるが、仕事で疲れているため起きる気配がない。

「あなた。お願い。私を病院へ連れてって！」

「なんだ？ 元気じゃないか。病院は昼にしろ」

夫は一度は起きたものの、寝返りをうつてまた寝ようとする。

瑚沙子は、夫の尻を叩いて声を大きくした。

「私。脳梗塞かもしれない。さっき手足が動かさなかったの。初期症状のうちに病院へ連れて行って。お願い！」

「何！ 脳梗塞だと！？ 本当に手足が動かなかったのか？」

夫はついに起きた。かなり驚いた表情をしている。それもそのはず、ずっと家事を瑚沙子に任してきた夫としては、妻の瑚沙子が脳梗塞になったら、代わりに家事をしなければならなし、妻の介護もしないといけなくなり、仕事どころではなくなるからだ。

瑚沙子はようやく起き上がった夫にすがった。

「そうなの。さっき本当に手足が動かなくて」

「それは大変だ。すぐに脳内科の病院へ行こう」

瑚沙子と夫は急いで布団から出た。

電話で夜間救命センターから今夜担当の脳内科の病院を紹介してもらい、二人は車で病院へ向った。

「あなた。私。怖いわ」

「大丈夫だ。早期に治療すれば、後遺症無しで回復するらしいから」
夜間救命センターから紹介された病院は、私立病院だった。

病院に到着した二人が夜間窓口を叩くと、あらかじめ救命センターから連絡が入っていたようで、名前を言っただけで二人は病院内に通してもらえた。

院内の通路は、夜間用の照明のみで薄暗かったが、脳内科の診察室だけは二人を招き入れるために、通常照明が明るく灯っていた。

二人はすぐに診察室に入った。

診察室には若い男性医師が座っていた。白衣の左胸にある名札は小坂となっている。小坂医師は、書類を見ながら言った。

「えっと、あなたが先ほど連絡された山田^{やまだ}瑚沙子さんですか？」
「そうです」

瑚沙子は、返事をしながら小坂医師の前にあった丸椅子に座った。夫は、診察が始まったのを見て、立つて待っているのも暇だと思いい、待合室に常備してある雑誌を読むために診察室を出て行った。

小坂医師は、瑚沙子の顔を見ながら話した。

「手足が痺れて動かなかったと報告にありますが、どんな状況だったのですか？」

「痺れはありませんでした。動かそうとしても動かさなくて、首も動かさなくて、声も出せなくて、目だけが動かせたんです」

小坂医師はカルテに瑚沙子が言った内容を書き込んでいく。

「頭痛はありますか？」

「ありません」

「目眩はしますか？」

「目眩もないです」

瑚沙子は、脳梗塞かもしれないという恐ろしい思いに怯えて、小坂医師に訴えた。

「呼吸はしていたんです。でも心臓が止まっていたんです！」

「なるほど。心臓が止まっていたんですね」

小坂医師は淡々とした口調で返事をしながらも、ペンの動きが一瞬止まる。だが、すぐに手を動かしてカルテに瑚沙子が言った内容を真面目に書き込んだ。書き込んでから、カルテにボールペンの先

を当ててリズムをつけてトントンと何回か叩く。考え事をしている時の癖のようだ。その癖は数秒で終わり、小坂医師はペンとカルテを机に置いた。

「先に心電図をとりますので、上半身の服を脱いでベッドに横になつて下さい」

「分かりました」

瑚沙子はベッドに座ってから上半身の服を脱いだ。50近いが胸の膨らみはまだ垂れていない。

小坂医師は、体をベッドに倒した瑚沙子の胸に計測器具を貼りつけていく。

「冷たいけど直に慣れますので我慢して下さいね」

「はい」

「約5分ほど安静にしていして下さい。決して起きないように」
「分かりました」

小坂医師は瑚沙子の上半身にタオルを掛けると、ベッドの周りにカーテンを張り巡らして、外へ出て行った。小坂医師が外へ出た時カーテンの向こうにある心電図の機械がチラリと見えた。

瑚沙子は、横目で機械を見てから瞳を閉じた。天井しか見る事ができないカーテンで仕切られた空間は、眼を閉じれば無限の暗闇に変わる。耳には機械の音が届き、小坂医師が動いているようで、白衣の布が擦れる音も聞こえる。

5分という時間は、瑚沙子が思っていたよりも早く過ぎていき、瑚沙子が居眠りをしようかと考えている時に心拍の計測は終わってしまった。

小坂医師はカーテンの中に入ってこなかった。声だけがする。

「山田さん。終わりましたので、ご自分で体についている器具を外してから服を着て下さい」

「はい」

瑚沙子が小坂医師に言われて服を着ていると、カーテンの向こうからまた小坂医師の声がした。

「次は頭のMRIをとりますので、身につけている貴金属は全て外して下さい。結婚指輪も外して下さいね」

「分かりました」

瑚沙子は診察室を出てから、夫に結婚指輪を預けた。

待合室で雑誌を読んでいた夫は、真面目な表情で結婚指輪を受け取り、失くさないように自分の左小指に装着した。

MRIは、瑚沙子が想像した以上に時間がかかった。その時間、約30分。

小坂医師からMRIの撮影時間を聞いた時に、瑚沙子は眠たいので仮眠でもしようかと思っていたが、MRIの撮影中はかなりの騒音で眠る事ができず、筒状になっている中は圧迫感も感じ、その中で約30分も続く騒音を我慢し続けるというのは、かなりの忍耐が必要だった。

MRIの撮影が終わった時、瑚沙子はベッドの上で横になっていたにもかかわらず、どっと疲れを感じて口から息を沢山吐いた。

その後、小坂医師に呼ばれて、瑚沙子は診察室で診断の結果を聞く事になる。

診断結果を聞く時は、夫も同席した。

小坂医師は、MRIの写真をライト付きの壁に貼り付け、白く映し出された瑚沙子の脳内画像を見ながら、瑚沙子たちに心電図を提示して、診断結果を伝えた。

「現在MRIの写真に異常と思われるものは写っておりません。心電図にも異常と思われる脈はありませんでした」

「そんなはずは」

瑚沙子は、信じられないようで、もう一度小坂医師に聞いた。

「確かに手足が動かせなかったんです。首も動かせなくて。声も出せなくて。心臓の鼓動も無くて止まっていたんです」

「ええ。そうでしたね。でも今は心臓も動いておりますし、MRIにも異常となるものは写っておりませんので、現在は大丈夫ですよ。なんでしたら、落ち着いて眠れるように、数日分の精神安定剤をお

出しましょうか？」

「精神安定剤ですって！」

瑚沙子は声をあげた。

小坂医師は、説明の相手を瑚沙子から夫に変更した。

「奥様は神経質になられているようです。昼間は軽いスポーツでもされて、夜は熟睡されたほうがよいかと思います」

「そういう事でしたか。分かりました」

夫は返事をすると言ち上がった。

「帰るぞ」

「でも、そんな。だって脳梗塞の前兆があつたんですもの。もっと詳しく調べてもらえば、脳のどこかに小さな脳梗塞があると思うんです」

瑚沙子は小坂医師に訴えた。

小坂医師は椅子の背もたれにもたれた。椅子がギリギリと軋んで小さな音を立てる。

「小さいものはラクナ梗塞というのですが、それも今は見当たらないですね。今は心配されず、ゆっくりお休みになったほうがいいですよ」

「でも、私は手足が動かさなくて、心臓も止まっていたんです」

「瑚沙子。もうそのくらいにしておけ。帰るぞ。俺は今日も仕事なんだ」

夫は後ろから瑚沙子の手を握る。

小坂医師は、真面目な表情で瑚沙子に言った。

「山田さんのお話は、カルテに正確に記録しておきますので、また心臓が止まったら、ご家族と一緒に当診察室にお越し下さい。精神安定剤は、どうされますか？ 内服されますか？」

「薬は出して下さい」

夫が瑚沙子の代わりに返事をした。

瑚沙子は、夫によって半ば強引に診察室から連れ出された。支払いを済ませ、精神安定剤を受け取ると、夫と一緒に私立病院を出た。

車に乗り込む。

夫はエンジンをかけてから、左手を瑚沙子に見せた。

夫の左小指と左薬指には、結婚指輪が仲良く並んでいる。

「瑚沙子。指輪。運転しづらいから、早くお前のを抜いてくれ」

「私。精神安定剤は、飲まないから」

「ああ。分かったから、早く結婚指輪をはめなさい」

「うん」

瑚沙子は、夫の小指から指輪を抜いて、自分の左薬指にはめた。

夫はハンドルを握って車を走らせた。

「精神安定剤は、今日仕事から帰ったら、俺が一錠飲む。だから分かる所に置いてといてくれ」

「あなたが飲む必要ないじゃない。どこも悪くないんだから」

車は言い合いをする瑚沙子と夫を乗せて、明け方の道路を走って行く。

瑚沙子と夫の人生は、やっと半分の所に差し掛かったばかり。これからの残りの人生もいろいろな出来事が待っているだろう。

瑚沙子と思う。自分にもしもの事があつた時、夫は今のよう隣にいてくれるのだろうか。と。

そして夫も思う。自分にもしもの事があつた時、自分と妻の瑚沙子はどうなってしまうのか。と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5657d/>

ざ・ほもさぴえんす

2010年10月14日17時31分発行